

Tanaka Yoshiaki

田中義昭

開発と 考古学

市ヶ尾横穴群・
三殿台遺跡・
稲荷前古墳群
の時代



新泉社

開発と考古学
目次

序 ———— 学びのサトを訪ねる 12

再見、市ヶ尾横穴群 12／稲荷前一六号墳の上に立つ 21／
大塚遺跡と横浜歴史博物館 28

第1章

——— 考古学への旅立ち 37

— 1 — 歴史学徒の一員に 38

学ぶなら歴史だ 38／日本史の専修生に 44／「都の西北」余録 51

— 2 — 大学の考古学研究室 58

畏友中村嘉男君 58／うろたえる新参者 64／遠見の考古学 70

— 3 — 和島誠一先生との出会い 77

地下研究室から追放される 77／和島誠一先生を訪ねて 82／
千客万来、「考古梁山泊」 88

第2章

——— 本番の舞台に立つ 97

— 1 — 考古学への瀬踏み 98

いざ見参！ 王子亀山遺跡 98／歴史学と考古学の風 103／
赤っ恥かきの土器拾い 109

— 2 — 試練の市ヶ尾遺跡群 115

発掘調査団に加わる 115／測量班でしごかれる 122／
一人前の発掘者を目指して 128

— 3 — 探究、古代の東国農村 136

市ヶ尾秋の陣 136／荏子田の「カンカンア穴」 142／古代の村は見えたのか 149

— 4 — 学窓考古学の日々 162

卒業論文への助走 162／石見の古墳文化を捉ええたのか 171／
発掘漬けの研究生 178

開発と考古学 191

1 考古学と教師の二刀流に 192

三殿台全面ボーリング調査 192／私立中高校の教師に 198／
遺跡と教室の二股稼業 203

2 三殿台遺跡全掘 209

いざ決戦場へ 209／大勢の支援・応援で完掘 216／史跡公園化にむけて 221

3 遺跡で、そして学校で 228

北部九州の考古学踏査行 228／武蔵校歴史研究部の活躍 234／
管理主義が強まる学園 243／生徒がパン屋をボイコット 251

4 港北ニュータウン計画の登場 260

考古学の原点を探る武研 260／怪物ニュータウン建設計画 267／
一人前の研究者として 275

破壊される遺跡、変貌する地域 285

1 ブルドーザー横目の発掘 286

高校の部活で発掘調査 286／結婚、そして調査の日々 296／朝光寺原遺跡の消滅 302

2 激闘、稲荷前の丘 312

革新市政への幻想 312／保存運動の火蓋を切る 318／
活発化する地域の保存運動 326／「古墳の博物館」を残そう 334

3 波乱の一九七〇年前後 343

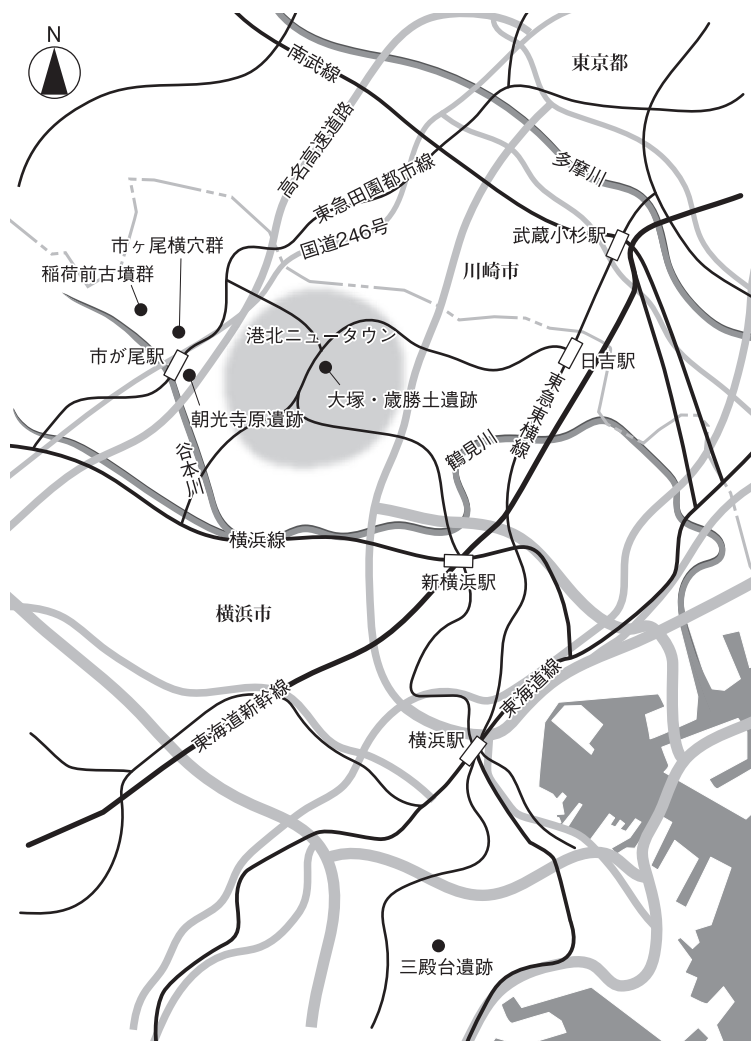
闘い破れて山河なしか 343／文化財保護の全国組織づくり 351／
大苦戦の子育て 357／和島先生逝く 365

4 焦点は大塚・歳勝土遺跡 372

憂苦を越えて 372／「港北」の文化遺産と自然を守る会 382／
最優先、大塚・歳勝土遺跡の保存問題 388／全開したニュータウン造成 398

遺跡群研究へ希望を託して 405 / 「防人の村」は見たのか 412 /
研究者、教師、家庭人の三つどもえ 424

註
433



本書に登場するおもな遺跡

開発と考古学

市ヶ尾横穴群・三殿台遺跡・稲荷前古墳群の時代

再見、市ヶ尾横穴群

二〇一三年七月の某日のことである。この年も教え子たちの同期会に招かれ、はるばる島根の田舎から東京に出てきた。そして卒業生との愉快的交流をすませた翌日、かねてから念願していた横浜市北部地域を訪ねることにした。そのわけは、かつて私が考古学を学び、研究者として歩みきつかけとなった遺跡や、懸命に頑張った文化財保存運動の足跡がこの地域にまだ残されている、との捨てがたい想いがあった。

そして、それらの遺跡や地域が激しい都市化のなかでどれほど保たれているのか大いに気にもなっていた。そこでここはひとつ現地を訪ね、あり様をいま一度この目で確かめておきたい、と強く望んでの決行である。

加えて私にとって横浜の地は、考古学研究のフィールドのみならず一介の教師として、あるいは無名の市井人として家族・職場の仲間・友人と共に苦楽を味わいながら激動の人生を駆け抜けた自分史の一舞台である。積み重ねられた想い出は分厚く、第二の故郷ともいえる土地であって、そこで結ばれた多様な縁は堅く広く、いまもって断ちがたいものがある。

一日かけての旅の相棒は、遺跡の保存運動の同志であり、後に職場の同僚として長く付き合ってきた無二の親友の金井英三さん^{ひでみつ}。彼は、横浜市青葉区(旧・港北区)大場町の出身で、北部地域の一帯は正真正銘の「ふるさと」である。待ち合わせは東急東横線武蔵小杉駅、午前十時と決めた。

約束どおり武蔵小杉駅に降り立つ。このところ毎年のことだが、今年の夏も猛暑で、朝から気温はぐんぐん上昇する。電車を降りると熱風が体をいつきに包む。思わず「暑い！」と声が出る。学校勤めの頃に通い慣れたはずのホームを歩いた。が、それは三十余年前のことである。駅はすっかり様変わり。周辺も高層ビルが林立して以前の面影はない。

改札口を通ったところで携帯が鳴る。「いま、どこにいるんだよ!」、金井さんの声だ。「改札を出たところだが……」、「じゃあ、すぐ前の道路脇に車を止めて待っているから」とせわしそくに告げられた。

駅前の風景もえらい変わりようだ。うろろろ、きよろきよろしながら金井さんの愛車トヨタRAV4を見つけて乗車する。「若者好みの車だねえ」と感心しながら。「ああ……、まあな。遠出するから、こんなのがいいんだ」と。

そういえば毎年秋には秋田・青森方面に出かけているとは聞いていたが、車では知らなかった。昨年も東北の被災地を訪問したらしい。地味だがじっくりと行動する金井さんらしい旅の仕方と納得する。

さて、今日の旅程だが、武蔵小杉から中原街道を下り、国道二四六号に出て西にむかう。まずは横浜市青葉区市ケ尾町にある神奈川県指定史跡「市ケ尾横穴古墳群」を訪ねる予定である。そして、時間が許せば同じ青葉区鉄町の「稲荷前古墳群」を見ておきたい。というのは、市ケ尾横穴や付近の集落遺跡群、それに稲荷前古墳群は二人にとってはまことに因縁深い遺跡だからだ。

車は、梶ヶ谷から馬絹を抜けて鷺沼まで来た。この先からは四車線の幅広い道路となるのだが、なんと渋滞が始まった。あらためて道路の両側を見わたす。住宅で埋めつくされ、ここここにマンション風の高層建物が、まるで草原のつくしのように頭に突き出している。

「いやあ、これは驚いた！」と思わずつぶやいた。じつは一九七〇年頃に、当時の横浜市緑区（現・青葉区）荏田町に住んだことがあった。二四六号の道路脇であったが、車の音もあまり気にならなかったし、建物は緑いっぱいの野山に囲まれていて、箱庭のような環境だった。それが、わずか半世紀のあいだに、こうも変わるとは！

やがて東名高速道路の橋下を潜り抜け、東急田園都市線の江田駅前を通過する。東名高速を疾駆する車の轟音、対向車線の車のエンジン音、通過する電車の音が響き合って頭がくら

くらする。すぐに進行方向左手に低い丘が見てきた。長者原遺跡があったところだ。「あのへんに都筑郡の郡役所があったんだよ」と指差しながら話しかける。彼は「ああ」と簡単に応える。心のなかでは大事な遺跡をむざむざ壊して、と悔しさが頭をもたげる。

金井さんにとって一帯は勝手知ったる土地ではあった。「長者原」というからには何かいわれのある場所とは見聞きしていたし、奈良時代頃の土器片が拾われていたということも片隅にあった。しかし、古代の郡役所跡とされるほどの屈指の遺跡であったとは、残念ながら知らなかった。

それもそのはず、郡役所跡の調査結果が判明したのは一九八〇年前後のことで、金井さんはすでに郷の地を離れて川崎に住み、私と同じ東京都世田谷区にある私立校に勤務していた。それ以上に、遺跡自体が一九六〇年代の終わり頃、東名高速道路で分断され、その後七〇年代になって土地区画整理により破壊消滅。しかも、遺跡に関する情報はわずかに専門家のあいだに伝えられていたに過ぎず、一般市民が知る由もなかった。

まもなく車は市ケ尾の手前の峠にさしかかる。道路左には、私たちが一九六六年に発掘した長谷遺跡があるはずなのだが、倉庫風の建物がどかっと座っていて遺跡があった様子など毫もない。前方の市ケ尾方面と背後の荏田方面を分けていた小高い山も丸裸になり、黄色い岩肌がむき出しになっている。

山の下にはトンネルがあり、西側出口近くに市ケ尾駅がある。そこで右折して北西に進ん

だ。このあたりも以前は薄暗い竹藪であったが、いまはきちんとした舗装道の両側に住宅や商店が軒を連ねている。もう、ここまでになると完全に浦島太郎だ。

あきれ顔になってみると、目指す市ヶ尾小学校前に出た。「市ヶ尾遺跡公園」は学校裏手の小山斜面にある。このあたりからは見覚えのある景観だ。ゆっくりと公園のなかに足を運ぶ。汗がじつと出てくる。木々の生い茂る山陰で風通しが悪く、なんとも蒸し暑い。

比較的に広い園内は、桜の老木が枝葉を目いっぱい広げていて太陽の光をさえぎり、薄暗く湿っぽい。見れば、ビニール袋などのごみが散乱して不潔な感じを抱かせる。置かれたベンチは傷み、人が休憩した気配もなさそうだ。「うーん、これでは！」とうなる。

市ヶ尾横穴群は一九三三年に発見され、横穴が多くまとまっていて出土品に優れたものがあることから注目され、一九五六年の現地調査直後に神奈川県史跡に指定されて長くその姿を保ってきた。ところが、高度成長時代になって田園都市線が開通し道路網が整備されてくると、いわゆる東京のベッドタウン化が始まり、駅の周辺から急速に市街地が形成されるようになる。車窓から見えたあの風景ができ上がってきたのである。

横穴群の周辺にも住宅が密集し、大きな小学校が遺跡脇に陣どることになった。一変した環境のなかで横穴自体の傷みが目立つようになる。ことに背後の丘陵が大規模に削り取られ、宅地造成されたことで地下水脈が断たれたため、横穴のうがたれた岩盤が適度な湿度を失って乾燥し、もろくなった。その結果、穴の入り口や内部の天井・壁が崩落する危険が生じてきたのである。

きたのである。

話は三十年ほど前にさかのぼる。一九八二年のことである。このような事態を憂慮した横浜市教育委員会は、横穴群とわずかばかり残っていた周囲の自然環境を取り込んで整備し、史跡公園として保護し、活用することにした。当時としては、局地的に残された遺跡と周囲の環境を保護する措置として、ある程度評価できる対策ではあった。

私は、一九五六年の市ヶ尾遺跡群（市ヶ尾町・大場町にある横穴群や集落遺跡をまとめた呼び名）の調査に参加し、その後も引きつづいて横浜市北部地域の調査と研究に携わっていた関係で、保存整備事業検討委員会の委員となり、事業の推進に一役買うことになった。

市ヶ尾横穴群は全部で十九基（古墳は一基、二基と数える）ある。これらは公園の奥手にある一群（A群）と右側に並ぶ一群（B群）に分かれている。一部の横穴を除いて大部分が見学路に沿って観察できる。まずはA群から見る。ただ、穴の内部まで見られるのは二基のみで残り入り口が封鎖されている。

じつはこの横穴群の保存整備で一番の難題は公開の仕方であった。墓の遺跡だから内部の遺体を収めた部屋の状態がわからないと是非を判断しようがない。部屋の形にはいろいろなものがあるから、なかに入って比較観察することで面白さも湧いてくる。

となるとすべての横穴の公開が前提になる。問題は、それで横穴が長期間保全できるのかということだ。千数百年ものあいだ、本来の姿をほぼ保ってきた遺跡がそのままでは崩壊す



市ヶ尾横穴 A 群の現況 (2019 年)



市ヶ尾横穴 B 群の現況 (2019 年)

る、そういう瀬戸際に立たされているのだ。現在の人々にむけて公開することと将来の市民の見学も可能なかぎり保障しなければならない。判断を下すことは容易でなかった。

結論的には、部屋の造りに目立った特徴があり、保存状態が良好な横穴を少数選んで、それを公開し、ほかは穴の入り口を補強し、看板を立てて内部の説明をすることになった。入り口閉鎖と同時に内部には土のうを詰めて崩壊防止に備えた。

と述べる、ことは簡単にすんだように聞こえるが、この入り口整備にもたいへんな苦労をした。なんとといっても岩盤そのものがもろくなっている。岩肌を強化しないと入り口の形を整えることはできない。コンクリートをなでつけて「はい終わり！」では実物感が失われるだけでなく、遺跡の品位を下げることにもなる。整備工事を請け負った建設会社の研究所が強化素材を工夫し実験を重ねて仕上げたのが、現在の姿。

横穴の前に立つと、秋の長雨のなかで補足調査と工事の進捗状態とを調整しながら苦戦したことが思い出される。岩肌が濡れて補強の実験ができない。調査もどこおる。予算と期間を心配した現場の責任者に詰め寄せられた。「適当にして先に進めてくれ」と怒鳴り声。こちらもそう簡単に譲れるかとばかりににらみ返す。一触即発であった。

あらためて公園奥の A 群を一巡しながら考えさせられる。公開された一つの横穴をのぞくと、壁面が乾燥して白っぽくなり、部屋の床に造られていた間仕切り石などが壊れている。入り口も補強材面が剝離しはじめている。公開の難しさを想わずにはいられない。そして、